

CALL を利用した自律型学習への展望Ⅲ

英米学科 大森 裕實

高等言語教育研究所に「CALL/ICT 部門」が設立されて本年度は 3 年目に入ったが、本学の外国語教育に対して、*Computer Assisted Language Learning* (以下 CALL) と *Information Communication Technology* (以下 ICT) を活用した自律型学習がどの程度まで可能となるのか、また、そのための支援には何が必要なのかについて検討し、諸活動を行なった。特に本年度は、本学外国語学部と同様の教育目標及び課題を抱える他大学への視察も実施して、本学における今後の「CALL/ICT 部門」の方向性を考究し、中期的目標を策定するための新たな一歩となる 1 年であったと総括することができる。

1. CALL 教室の整備計画——本学学務課及び教育研究センターとの連携

本学には平成 10 年度の長久手キャンパス開学移転時に設置されたアナログ方式の LL 教室 5 室(大 2 室と小 3 室)が存在したが、それを CALL 機能を備えたデジタル方式多目的メディア教室に改修する計画は本年度末をもって一応完結した。本学学務課に適宜アドバイスをしない、共に検討を加え、本学の視聴覚教育施設の整備に貢献した。以下に、いわゆる CALL 教室整備と導入した CALL ソフトについて記載する。なお、下線部が本年度活動と関係する。

- ① G202 教室(旧 LL30 人教室):新型 PC29 台と簡易型 CALL“Wingnet”(コンピュータウイング社製)の整備(平成 23 年度末改修)。
- ② G205 教室(旧 LL30 人教室):新型 PC29 台と簡易型 CALL“Wingnet”(コンピュータウイング社製)の整備(平成 23 年度末改修)。
- ③ H205 教室(旧 LL50 人教室):新型 PC50 台と PC@LL(内田洋行製 CALL)の整備(平成 18 年度改修及び平成 22 年度末再改修)。
- ④ H204 教室(旧 LL50 人教室):新型 PC50 台と PC@LL(内田洋行製 CALL)の整備(平成 21 年度末改修)。
- ⑤ G204 教室(旧 LL30 人教室):新型 PC30 台と簡易型 CALL“Wingnet”(コンピュータウイング社製)の整備(平成 20 年度末改修)。

上掲いずれの場合にも、新たな CALL システム導入後には、本学教職員を対象とする説明会を開催してきた。教育研究センター及び学生支援センターとも連携し、当該施設を利用する機会が多い(非常勤講師も含めた)本学教員に加えて、授業をサポートする機会が多い学務課職員を対象とする「PC@LL を利用した授業管理・運営方法」を開催する段階まで発展している(学務課担当は杉浦秀一主事)。

2. ICT 活用のためのワークショップ——関連学会との連携と社会的貢献

大学英語教育学会(JACET) ICT 調査研究特別委員会から依頼を受けたワークショップについて、本報告者と新任の Brett Cumming 講師(本学英米学科)が協力して、JACET 中部支部第 28 回大会(2011 年 6 月 12 日)において実施した。これは、Edgar Pope 教授、David Watts

講師(いずれも本研究所員)と共に過去 2 ヶ年(2009-2010)に行なったワークショップ形態を継承し、本部門のサポートを受けて、本研究所研究員が行なった学界及び一般社会に対する社会的貢献の一環として位置づけられる。本年度のワークショップの内容は **Incorporating CALL in the Classroom: an emphasis on websites beneficial to L2 learners (Cumming)** と **CALL (Computer Assisted Language Learning): does it broaden your horizon? (大森)** という表題が示唆するように、多様な URL から英語科目の語彙・文法指導や音声指導に役立つものを厳選して利用することが、当該授業の活性化につながることを強調したものである。

3. CALL 教室を利用した学生自主学習のススメ——語学試験対策としての H205 教室の運営

本年度も引き続き、「語学試験(TOEFL/TOEIC/IELTS)受験のための学生自主学習」を次のような要領で実施した。参加者数に鑑みると、実施日程の組み方及び PR の方法をさらに工夫する必要はあるが、本事業を「資格検定に対する学生支援」と明確に位置づけて、今後も計画性をもって積極的に推進することが、本研究所運営会議で確認された。

- (1) 場所: H205(CALL)教室。
- (2) 目的: CALL を利用して語学試験(TOEFL/TOEIC/IELTS 等)受験のために学生が自主的に学習することを支援する。
- (3) 日程: 2011 年 7 月 6 日, 8 日, 20 日, 22 日[前期] / 11 月 16 日, 30 日[後期]
- (4) 当該時間帯の管理・運営のため SA が常駐する。
- (5) 提供教材: 従来からの 3 種類の複数英語教材(TOEFL/ TOEIC/IELTS 対策)に加えて、スペイン語検定教材、ドイツ語検定教材、フランス語教材、ポルトガル語教材などに拡張し、Website からの厳選情報も提供。

4. 本学学生のニーズに適合した学習環境の整備——国際教養大学(秋田)LDIC の視察

平成 23 年 11 月 24-25 日に実施した国際教養大学(Akita International University)視察では、特に、学生の自主的の外国語学習支援のための施設「言語異文化学習センター」(LDIC)の存在とその位置づけが注目された。同様の環境整備は、本学と同質学部をもつ近隣の私立大学でも加速度を増している——中京大学国際英語学部の「LS Wing」や名古屋外国語大学の「メディア情報教育センター」なども視察。公立大学の拘束的な発想を転換して、“恒常的な言語学習空間”を設置・維持することを可能にするグランドデザインの構築が急がれる。

5. 今後の重点的課題

CALL を利用した自律型学習の向上を図ることにより、いっそうの社会的貢献に寄与することが期待される。具体的には次の事項の完遂が今後の課題となる。

- (1) 「語学学習コミュニティ」形成を目指した CALL 教室の無理のない開放化が可能かどうかの検討を行なう必要がある。また、そのための具体策を提言する。
- (2) いわゆる「語学ラボ」というものが、授業利用だけでなく自主利用を目指して開発されているということを学内の専門外の人々にも十分に認識してもらい啓蒙的活動も必要である。それが不十分であると、上掲(1)の実現に向けての障壁となるからである。
- (3) 教室環境で利用する閉鎖型 CALL から、学生が on demand で自由に活用できる開放型 CALL [NBLT (Network-based Language Teaching)]構築への発展可能性を探る。